

## ■メメント・モリ／桜井直樹

### ・序章

僕はただの大学院医学部の生徒だ。

医学部と言っても、専攻は医療ではなく、機械技術。

義手義足を作ったりというのが昔の授業だったが、今ではコンピューターで心臓を動かすシステムを作ったり、脊髄に取り付けて脳に司令を出す装置を作ったりしている。

そしてそろそろ留年もしづらくなり、いい加減に卒業を控えた僕が誰にも内緒で作っているのが、このアンドロイド「ツヴァイ」だ。

自宅に機材を持ち込むにはさすがに高価で場所も取るので、僕が大学時代から研究し続けた彼女を完成させるのが卒業までの自分に課した課題だ。

本当は一度完成したのだが、感情コントロールがうまくいかずに自殺させてしまった過去がある。

それが「アイン」。

彼女の死を無駄にしないために、僕はツヴァイを完璧に完成させなければならない。

だから、アインにプログラムしてあった「死」という概念を、敢えてツヴァイには差し込まなかった。

もちろん、死ぬということの理論は理解しているし、殺人などが重い犯罪であることは教えている。

でも、誰かを「殺す」とか、自分が「死ぬ」という概念に持ち込まないようにするのは一苦勞だった。

アインを自殺させる方法は、僕の声で「死んでくれ」と頼むことだった。

主人に絶対服従のアンドロイド「アイン」は、その一言で自己の機能をすべて停止させ、核の部分で自爆させて逝った。

感情豊かで魅力的だったアインは、僕のたった一言であっけなくただのメカ以下のガラクタに成り下がった。

その時に僕は今までになかったくらいに悔いた。

本物の人間を殺すよりも罪悪感を覚えたし、それこそ幼少の頃から育ててきた娘を殺した気持ちになった。

そして、それが現代のどんな法律に当てはめて考えても、僕には罪や罰は発生しないと理解した時、発狂した。

・ 第一章：過去

アインを作ろうと思ったのは、高校2年の夏休みだった。

自由研究に苦労したからではない。

まだ大学の進学先も考えていなくて、父親が医者だったから、自然と僕もそうなるのかなあ、程度に考えていただけだった。

でも医療が人の命を救うだとか、そんなきれいごとが通じるほど僕は人の気持ちがわからなかった。

医者の子で金持ちで、勉強もスポーツも出来て、そこそこ顔も悪くないという、少女漫画の世界じゃ必ず主人公に愛される要素を持っていた僕だけれども、皮肉なことに結局漫画は漫画だった。

現実はと言うと、先生にももれなく好かれていた僕を誰にも気づかれることなく、クラスメイトは陰湿にいじめた。

最初は机の上に「学校来るな」とか「死ね」とか書かれたメモが置かれている程度だったけれど、中途半端にやさぐれていた僕は彼らの目の前でその紙屑をビリビリと破き、静かにゴミ箱に捨てた。

そんなことが一週間ほど続くと、今度は手段が荒っぽくなった。

上履きのサンダルが捨てられていたり、ラブレターを装った封筒にカッターの刃が挟まれていたこともある。

弁当が捨てられていたこともあった。

体育の授業中に鞆が荒らされていて、何度もエロ本やコンドームの箱を突っ込まれたり、盗撮されたのであろうクラスメイトの女子の着替え姿の写真などが何枚も出てきた。

変態、キモイと言われたけれど、別に僕が好んでそうしたわけでもないのだから、それらも適当にゴミ箱に捨てた。

いらぬものは、みんなゴミ箱に捨てた。

夏休みの最後の日、両親と3人で日帰り旅行に行った帰りのこと。

医者のお父さんと、看護師のお母さんが、もう親離れして一緒に旅行に行ったりする機会も減るだろうからという理由で、ありきたりだけれど箱根あたりに行った。

うちは家族仲はいいので、僕も高2にもなっても、両親との旅行が楽しかった。

美味しい物を食べ、きれいな景色を焼き付け、温泉を楽しんでから帰路につい

た。

父親の深緑のアストンマーチンで、高速道路をスイスイ走っていた。

運転席には父親、助手席には母親、疲れた僕は後部座席で横になっていた。

うとうとしていたかも知れない。

そこで母親の短い叫び声のようなものが聞こえたかと思うと、僕達が乗った車は宙を舞った。

僕も車の中で無重力状態を体験した。

必死でぶら下がっているシートベルトの端を掴んだ。

何が起きたのかまったくわからなかった。

気がついたら病院にいた。

頭と身体がそこらじゅう痛い。

なんだか包帯でぐるぐる巻きにされているみたいだった。

目が覚めて初めて視界に入ったのは、涙ぐむ母親の顔...ではなくて、無機質な白い天井だった。

誰もいなかった。

僕は自分の身体にたくさんくっつけられているコードや点滴を見回して、ナースコールのボタンを押した。

決められたいつもの作業のように、慣れたものだった気がする。

すぐに看護師さんが2人やってきて、「気が付きましたか？」と言い、遅れて医者もやってきた。

名前を聞かれたので、自分の名前を名乗ったら、安心した顔をされた。

どうやら自動車同士の事故に遭ってしまったらしい。

対面通行の高速道路で、居眠り運転の観光バスがこちらに突っ込んできたという。

さすがのアストンマーチンも、観光バスが相手じゃ敵わないなど、他人事のように感じた。

やはり僕には何かが欠落しているらしい。

他に感情はわかenかった。

多分わかっていたんだと思う。

だってもう高2だ。

後部座席で横になっていた僕がこの状態で、挑んできた相手が大型の観光バスなら、両親が生きているはずがない。

医者がなんとも言いづらそうにしていたので、「両親は亡くなったんですか？」と聞いた。

きっと傍から聞けば、とても乾燥した声で、何の遺憾も感じ取れなかったことだろう。

やさぐれた高校生だ。

「...残念ながら...」と沈痛な面持ちで医者は言ったけれど、多分この人は父親と同じで何度も人の死に関与してきただろうし、何度もこんな言葉を口にしたのだろう。

確かに残念なことだ。

「そうですか」と僕は言い、自分の状況について聞いた。

1ヶ月ほどの入院で、検査に問題がなければ退院できるんだそうだ。

幸いすぐにうちの住み込みの家政婦さんがお見舞いに来てくれて、僕の身の回りの世話をしてくれた。

脳にも異常はなく、身体の痛みはあれど、骨折などの重症を負っていなかったので、本当に1ヶ月ちょっとで退院できた。

家政婦さんはもう少し家でゆっくりした方がいいのではと言ってくれたが、僕は翌日からまた学校に行った。

僕が事故に遭ったことも、両親が死んだこともすでに有名になっていたから、1ヶ月やそこらで平然と登校してきた僕を、さすがに教師も吃驚した目で見た。クラスメイトは僕をいじめることをやめた。

父親は開業医ではなく、大学病院に務めていたので、後を継ぐ必要もなかったけれど、子供の頃から漠然と、自分は医者になるんだろうなあと思っていただけに、他に将来の選択肢が浮かばなかった。

だから勉強しかすることがなかったのだ。

莫大な遺産と土地を残され、僕は無事大学に入った。

その時に、住み込みだった家政婦さんに暇を出した。

つまり、多額のお金を渡して追い払ったわけだ。

これで僕は完全に一人だ。

孤独だったのは今も昔も変わらないし、ただ身の回りの世話をしてくれる人間がいないことだけは不便を感じた。

アンドロイドを作ろうと思ったのは、実験的な試みもあったけれど、高校生の

僕にとっては、愛する対象が欲しかったのかもしれない。  
今はそんな初心は忘れているけれど。  
そこから僕の「アイン」計画は始まった。

自分専用の研究室が欲しくて、院に上がった。  
そこでは、個室を与えてくれるし、鍵も掛けられる。  
自分が何の研究をしているかは担当の教授に伝える必要があったが、そのへんはアインと並行して研究している他の題材を言えばよかった。  
院でも僕は優秀な生徒だったから。  
大学時代から6年かけて、アインは一度完成した。  
人工皮膚を移植し、関節も滑らかに動く。  
声も美しい歌を歌えるようにしたし、重さを控えるために身長は小さめにした。  
アインはどこから見ても完璧な普通の女性だった。  
さすがに性器までは作らなかったが、胸も豊かで柔らかく、服を着れば世間に紛れ込んでもなんら違和感はないだろう。  
実際にやっている研究より、アインのことを学会で発表したいくらいだった。  
完璧に完成したはずのアインを連れて、僕は家に帰った。  
学習機能の秀逸な人工知能をプログラムしてあるので、掃除や洗濯、料理まで、なんでもこなせた。  
体温も持たせたので、疲れた夜は抱いて眠ったこともある。  
僕はアインを愛した。  
アインも僕を愛してくれた。  
やがてアインは僕の唯一の心の拠り所となった。  
母と恋人をいっぺんに得たような気持ちだった。  
幸せだった。  
多分、あれを幸せと呼ぶのだと思った。  
そんな感情は今まで持たなかったから。  
もちろん両親のことは愛していた。  
自慢の家族だった。  
しかし、家族愛ではない無償の愛なんて、この世に存在するはずがないと思っていた。  
アインは僕に献身的に尽くしてくれた。

性器を作らなかったことを幾度悔やんだかわからないくらい、僕もアインを欲した。

もちろんアインのことは誰にも秘密だった。

自慢する相手もないし、誰かに打ち明けることで、アインとの共有する秘密がなくなってしまう気がしたからだ。

しかし幸せな時間はどうも僕に長く滞在してはくれないらしい。

ある日突然それはやってきた。

「私、故障してるみたいなの」

アインは帰宅したばかりの僕にそう打ち明けた。

故障？

それならば検査すればすぐにわかるし、だいたいアインが故障を自覚するなんてあり得ない。

というか、「故障している」と自ら言わせるほどの高機能はまだ持たせられていなかったのだから。

そこで具合を聞くと、僕は啞然とした。

アインは恋をしていた。

僕に。

そう、感情の制限ができない、不治の病に侵されてしまったのだ。

「あなたのことを思うと、自分をセーブできなくなるの。今すぐ大学院に走って行って、あなたに飛びつきたくなるの。あなたが家に帰るまで、おとなしく待ってられないの」

だいたいそんな話だった。

そしてその夜に、僕は再び死の淵をさまようことになる。

寝ている間に、隣にいたアインが僕の首を締めてきたのだ。

「好きなの。どうにもならないの。あなたを私のものにしたい」

声を荒げることもなく、アインはそう言った。

そうか、アインに愛されて殺されるのなら本望だ...そう一度は思った。

幸せの絶頂で死ぬのが一番いいのだ。

そしてそれが今なのだ。

しかし、アインへの愛情より勝るものが脳裏に浮かんでしまった。

それは愚かにも、「もっと感情のセーブの利く完璧なアンドロイドを作りたい」

という欲望だった。  
僕はその欲望に負けた。  
あっさりと負けを認めた。  
そしてアインに告げたのだ。  
「死んでくれ」



## ・ 第二章：経過

アインの死後、僕は再びアンドロイド作りに励んだ。  
基礎はアインの構造が使えるので、ツヴァイを形作るのは意外とスムーズにできた。  
性器を作るのだけは、とても苦労したが。  
あとは感情コントロールのプログラムだ。  
死の概念は難しい。  
害虫は駆除して欲しいが、殺人マシンにはしたくない。  
アインのように愛を潤沢に湛えた新作が、もう僕には必要不可欠だった。  
一度知ってしまった愛情を、そうやすやすと捨てられるわけがない。  
ただでさえ思春期に両親を亡くすという経験をしているのだから、もう誰にも死んでほしくなかった。  
アインを殺したのは僕だ。  
はっきりと「死んでくれ」と言った。  
それはアインにとっては人生最悪の拒絶の言葉だっただろう。  
だから、人間に対しての殺意はどんなに感情が歪んでも発生しないようにコントロールする必要があった。  
ツヴァイには僕が死ぬまで生きてもらわなければならない。  
そうでないと、近い将来に死に瀕する自分の姿がありありと想像できた。  
もうすぐこの研究室も使えなくなる。  
遺産を使えばこんなもの、システムごと買い取ることができるだろうが、そんなに大それた行動はしたくない。  
だから、僕は間もなくツヴァイを完成させなければならないのだ。

医者としての知識だけでは当然不十分だったから、システム構築関連の本を図書室で読みまくった。  
しかし、アンドロイドへの応用力はほとんどなく、工場の全自動運転システムなどを作る工程などの知識ばかりが頭に溢れた。  
それでもひねれば何か生まれるかもしれないと思い、期待を抱き続けた。  
いや、本当に抱き続けたのは、アインへの罪悪感だったのだと思う。  
でも僕は今度はツヴァイを愛する。

アインと同じように、もしくはそれ以上に。

だからとてもツヴァイの完成を急いだ。

しかし、少しのミスが命取りになる作業だから、無限とも言える行動パターンを可能な限り思い描き、シミュレーションする。

特に愛情面には念を入れた。

愛は寄り添うことで、決して殺すことではない。

永遠に一緒にいるために、僕がきみのものになるためには、お互い生きなければならぬ。

敢えてアインが口にしてきた「故障」という名の恋愛感情もプログラムに組み込んだ。

母性愛ではなく、恋愛感情として。

そういうこともある、でも人を自分のものにするためには殺してはいけない。

もちろん自分が死ぬことも禁止だ。

だから、ツヴァイには敢えて殺意の対象を人間と自分以外の者に限定した。

害虫や居眠り運転の車は敵。

でも通り魔や殺人犯は敵じゃない、と。

万一のことがあっても、ツヴァイを殺人マシンにすることは避けたかった。

21世紀になってもこんな高度なアンドロイドの制作の成功例はなかったし、僕も発表する気はない。

きっと、過去にいた成功者もそうだったのだろう。

ロボット型のペットや人型の家政婦は、今や一家に一台くらいの普及率だけど、アンドロイドが恋人という人間はまだいない。

公には。

これからもきっとそうだろう。

ロボットならもっとロボロボしたわかりやすいカタチで、コンピューターの抑揚のない声で、無駄がない。

もちろん、感情は忠誠心以外は持ち合わせていない。

それでいいのだ。

この国は効率を優先する国なのだから、欲しいのなら自分で作ればいいだけだ。

誰にも迷惑を掛けなければ、何でも許されるのだから。

・ 第三章：構築

ツヴァイを完成させるにあたって、最終的にどうしても組み込まなければならないプログラムがあった。

強制終了だ。

もし何らかの事故で僕が死んでしまった場合、アンドロイド制作の事実やデータの流出を防ぐために、ツヴァイを止めなければならない。

マスターなしで永遠に生き続けるアンドロイドは、やがて暴走し、世間を騒がせることにもなりかねない。

だから、僕がいなくなった場合の停止方法を組み込まなければならなかった。

ツヴァイの電源は光だ。

部屋の LED 電球でも、窓から入ってくる太陽の光でも十分効率的に動くため、古いロボット映画に出てくるような、常にドリンクとしてガソリンを流しこむ必要はない。

たとえ雨の日や曇、台風などの悪天候が続いても、長時間の停電が起こっても、まったくの暗室でない限りどこからか光は漏れてくる。

それをアインやツヴァイは効率的にエネルギーに変換して、自分を駆動させることができるのだ。

いわゆる自己発電とも言えるだろうか。

だからツヴァイを止めるには、完全な暗室に長期間閉じ込めておくことでしか、活動を止めることができない。

バッテリーが非常に低燃費なため、完全な暗室に入っても 1 週間から 10 日は生きていられると思われる。

問題は どうやって最後にツヴァイを止めるかだった。

ツヴァイが失踪するならともかく、逆に僕の方が先にいなくなった場合、遠隔操作もできない。

しかし自殺を組み込むことは避けたいので、平穏に残りの人生を生きてもらい、ある年で活動停止になることを設定するほかなかった。

問題は、それを何年後にするかだ。

僕はそんなに長生きするつもりはない。

まだ 30 歳にもなっていないのに、こんなことを言うのは非常に横柄だと思うけ

れども、今はツヴァイの完成を目指すことで目的を持って生きることができているが、仮にツヴァイが完成すれば、僕のその後の人生はどこへ向かえばいいのだろうか。

真面目に医療の道へ戻り、父親のように医者として人生を全うすればいいのだろうか。

それなら、僕が定年を迎える頃あたりにツヴァイの停止を設定すればいいのか。いや、定年後に長生きする可能性を考えれば、ツヴァイにももっと長期間生きてもらわなければならないし、できれば僕の死を看取って欲しい。

僕の寿命が不明である以上、ツヴァイの寿命の設定もまた未定であることは致し方かなかった。

プログラム技術というのはかなり応用の効くものではあるが、さすがに人の残り寿命の計算まではできないようだ。

さしあたって 20 年程度に設定しておき、その後も僕が生きている場合は都度更新するというのが、現在のところ最終的に行き着く先だった。

僕は別に、機械しか愛せない性的不能者などではない。

人格破綻はしているかも知れないが、人付き合いだってそれなりにする。

もちろん、社交辞令でしかないが、年齢相応な成人としての常識は持っているつもりだし、深くはないが交友関係も広い。

仮にも医療という分野にいるわけだから、自分の殻だけに閉じこもってばかりはられないのだ。

しかし、仲間だとかライバルだとか恩師だとか友人だとか、そういった言葉にできる関係のものは僕にとって、すべて偽装でしかない。

現実世界で生きていくためのかぶりものだ。

通常の間人なら持っているはずのものは持つておかなくてはいけないし、多少は通常の間人の持つていないものまで持つていたり、人より多く持つていたりすることもある。

でも僕には特に意味のあるものではなかった。

過去の陰湿ないじめによって、すでに人間不信は定着していたし、かと言って被害者面はしない。

あいつらはあいつらで、何か幼稚な事情があったんだろう。

僕がツヴァイを完成させることに夢中になるように、あいつらも自分が生き残

るために、つまり自分がいじめられる側にならないように、立場を確立させておかなければならなかったのだ。

だから僕はスケープ・ゴートになった。

別に構わない。

誰も恨んでいないし、それどころか今では僕をいじめた奴らの顔も名前も思い出さない。

僕にとってはその程度のことだった。

興味がないのだ。

他人に。

人間に。

世界に。

例えば「明日、世界が終わります」と聞かされても、「ああそうか」と思いながら普通に夕飯を食べるだろう。

最後の晩餐といった豪華なものではなく、いつもと変わらない白飯と味噌汁と焼き魚などで、熱いお茶を飲みながら。

僕はそういうところにいる人間だ。

別に世界に絶望しているわけではないし、国や政治家を恨んでもいない。

起こるべくして事は起こるのだろうし、たとえその渦中に巻き込まれようとも僕は傍観者であることができるという、特に必要でもない才能を持っているというだけだ。

僕は僕にとって他人でもあった。

いつも自分の目線以外のところから自分を見ていることがあった。

だから、僕を僕として見てくれる目が欲しかった。

アインを完成させた時、一瞬でもそれを得てしまったために、以来僕は何よりそれを欲するようになってしまった。

もし仮に、純粹無垢な一人の女性が、かつてのアインのように僕を愛してくれるというなら、僕にはツヴァイを完成させないという選択肢もあるだろう。

が、現実的に考えて、そんなことはあり得ないと思う。

悲観的になっているわけではないが、少なくとも現在までの経験の中では、そんな無償の愛をくれたのは、僕の両親だけだった。

僕がやがて有能な医者になるであろうことを予測して近づいてくる女性はたく

さんいる。

けれどそれは僕を愛しているのではなくて、僕の持つ肩書きや財産などが主な目的だろうということは見て知れる。

男でも、僕とコネクションを持ちたがる奴はたくさんいた。

院の主席にいる僕とつながりを持てば、損をすることはないだろうという値踏みだ。

だから僕は人間は選ばないのだ。

僕は僕の欲する目と愛情を、自ら作り出すことができる。

幸いなことにその潤沢な才能は与えられ、僕もそれを有効に利用している。

自己完結できるなら、それに越したことはない。

他人を巻き込む必要はない。

自分でできることは自分です。

ただそれだけだ。

・ 第四章：完成

ツヴァイが話し始めた。

アインと同じ声で、同じ顔で。

「アール、私は何故あなたのことをこんなにも愛おしく感じるのかしら」

アール、というのは、僕のイニシャルだ。

アインもツヴァイも数字だから、僕もアルファベットで良かった。

その方が、お互いをより身近に感じられる。

「ツヴァイ、それは僕が君をととても愛しているからだよ」

強く、ツヴァイを抱きしめる。

もうすぐ完成する、僕の愛しい人。

「嬉しい」

ツヴァイはそう言って、僕の髪をさらりと撫でた。

温かい。

摂氏 36.7°Cの体温。

僕とほぼ同じだ。

ぬくもりというのは、人を無防備にさせる。

安心感を与える。

僕は幼児に戻ったように、しばらくツヴァイにしがみついていた。

ここ数日は、毎日確認作業の日々だ。

プログラムは完成した。

あとは不備不足がないか、無駄がないか、数字とアルファベットの羅列を眺めながら逐一確認し、ツヴァイに話しかけた。

明日にでも、研究室から自宅へ連れて帰ろうと思う。

卒業までにはまだ余裕があるから、万一の時には研究室で調整ができるし、その必要がなくなれば、研究室のデータはすべて僕の自宅の PC へと移し、ここには上辺だけの偽装の研究資料が置かれるだろう。

人類が長生きするために研究された、さまざまなデータを入れ込んでいく。

もちろん、ツヴァイ制作の傍ら、僕が卒業のために研究してきたものだ。

内容は偽りではない。

きちんと未来の医療を考えた、まっとうな研究内容だ。

人工心臓のサブエネルギー配置や、痴呆に侵された脳のクリーニングの動物実験例、解離性障害の統一方法の新しい提案など、無難で目に付く研究内容になっている。

未来には生かされるはずだ。

僕はもう手を貸さないが。

そして、ツヴァイとの暮らしが始まった。

順調だった。

僕がツヴァイを見つめると、ツヴァイは僕を見つめ返す。

アインとは口づけしかできなかったが、ツヴァイとは肉体的にもつながることができた。

僕の欲望をツヴァイの中で暴発させても、無責任に子孫繁栄させる心配もない。言葉で、身体で、空気で、音で、僕たちの持つ何もかもを使って、僕とツヴァイは愛しあった。

どんなに予想外なことが起こっても、ツヴァイは暴走しなかった。

故障を訴えることもない。

僕は研究室のデータを自宅に移し、予定通りに研究所のデータを置き換えた。

ツヴァイを完成させたからといって、僕はツヴァイとの愛欲に溺れることもなく、真面目に主席で院を出て、研修医になった。

そして大学病院につとめる医者になった。

人の命を救い、それを長続きさせた。

ツヴァイの愛は僕を人間として更生させたのか、僕は少しずつまともな人間に紛れて生きていくことができるようになっていた。

もちろん、年をとるということが、それを促すこともわかっていた。

すばらしい日々は僕が思ったよりも長く続き、そして今もなお変わらず続いていた。

恐怖すら覚えるほどに。



・ 第五章：永遠

きっと、あまりにも長い間不在だった幸福に酔いしれているうちに、僕は大事なものを見過ごしてしまったのだと思う。

すばらしい日々は永遠に続くように思い、僕はツヴァイの寿命を追加して書き換えた。

僕はツヴァイがいれば生きられる。

それも幸せに。

ツヴァイはなめらかで温かく、柔らかく慈悲深い。

僕のほうで暴走したようにツヴァイを愛し、もっともっとと食欲を求めるようになっていた。

ツヴァイはいつも見事にそれにこたえてくれ、僕を愛した。

平和ボケ、という言葉はまだ死語ではなかったらしい。

まさに今の僕は平和ボケそのものだった。

ツヴァイとの関係さえうまくいけば、僕の人生のすべてがうまく流れる。

仕事でも認められ、社会的地位も上り詰めた。

そんなことはツヴァイとの生活に比べればまったく何の価値もなかったが、僕の評判だけが世の中を独り歩きし、成功を納め続けた。

そんなある日、ツヴァイはあの日のアインと同じことを口にした。

「アール、私、故障しているみたいなの」

僕の脳内で強引に過去の記憶が引っ張り出された。

「どうしたんだツヴァイ」

僕は少し恐怖を感じてツヴァイに訊ねた。

「あなたのことが欲しくて欲しくてしかたがないの。あなたを私だけのものにしたい。何故かしら」

「大丈夫だよ。僕はずっとツヴァイだけのものだよ。安心していい。僕は君だけのものだ」

「嬉しい」

ツヴァイは僕を抱きしめた。

その強い力は、脊椎が折れるかと思った。

「ツヴァイ」

僕はツヴァイを止めた。

「どうしたの、アール」

「ツヴァイこそ、急にどうしたんだ？何か変わったことでもあったのか？」

「いいえ、私はあなたが欲しいだけ。私だけのものにしたいだけなの。愛しているわ、アール。大丈夫、あなたは私だけのもの」

そう言って、ツヴァイはもう一度僕を強く抱いた。

僕の脊椎の折れる音が聞こえた。

・ 終章

僕は死んだ。

ツヴァイによって殺された。

だから、その後のツヴァイのことは知らない。

ツヴァイが僕のデータをあさって自分の停止のさせ方を知り、僕をベッドルームに運んで横たえ、窓のカーテンを完全に締め切り、電気をブレーカーから落とし、僕の隣に横たわって僕と手をつなぎ、そのまま目を閉じて10日以上待ち、やがて動きを止めたことも。

愛しているわ、アール。

大丈夫、あなたはずっと、私のもの。

ああ、そうだ。

僕は永遠にツヴァイと一緒にいられるんだ。

< 終 >